ケント大学
出張報告

2017.7.10

大澤由実・佐々木結
京都大学・学術研究支援室

訪問の背景：評価ツールとしてのMetricsに対する最近の動き

2012: ‘San Francisco Declaration on Research Assessment’ (DORA)

・細胞生物学分野の学会、学会誌編集者、研究者が中心となり、ジャーナル・インパクト・ファクター（JIF）の限界を指摘。トムソンロイター含む各方面へ改善要求。

April 2015: ‘The Leiden Manifesto for research metrics’

・計量データ・指標の責任ある利用のガイドラインとなる10の原則を科学計量学コミュニティが共同でNatureに発表。

July 2015: ‘The Metric Tide’ by HEFCE

・HEFCE（英国高等教育財政審議会）が発行したREFへのMetrics利用を議論する報告書。REFのPeer Reviewとの比較をしつつ、Metricsの効用も認めつつ、それだけに依存することの危険性も指摘し、Responsible Metricsという概念を提唱。ケント大URAのSimon Kerridgeがメンバーとして参加。

Jan 2017: ‘The Future of Research Assessment – Peer Review vs. Metrics’, Kent Business School (KBS) Research Event

・Metricsベースの評価がグローバルに主流になりつつあることへの危機感からケント大KBSのMingers教授が企画。イギリス国内５大学、ライデン、アムステルダム大学の研究者がそれぞれの分野で発表。人社系は反対・賛成意見が分かれるが、基本的にはLeiden Manifesto, Metric Tideの流れを再確認。

Feb 2017: ‘Using bibliometrics responsibly’ Policy on Responsible Metrics by Loughborough University

・Leiden Manifestoを大学内の各オペレーションに反映させるための第一歩。地方の小規模総合大学だが、Times Higher Educationにフィーチャーされる。

この２つに
ケント大が関与

Simon Kerridge
Director of Research Services

Metrics Tideのその後

- REFは本来的にピアによる評価。REF2014を終え、次のREFに向けて、研究評価プロセスにビブリオメトリクスをどの程度入れるべきか、そのバランスを諮ったのがThe Metrics Tide。
- その後、次のREFに向けて、各Panel（A、B、Cは社会科学、Dは人文学）で評価のために必要な評価指標を選択する過程が始まっている。各PanelではOutputとして提出された論文、書籍等のピアによるレビューに加えて、最終的な評価のために参考とする資料の提出をHEFCEから求めることができる。その資料として、引用データ、トップジャーナルへの投稿情報など、Panelの判断で選ぶことができる。Panel Dの人文学では、これまで一切メトリクスデータを取り入れなかった。Panel Cの社会科学では、経済学など一部のSub Panelが導入したのみ。
- Panelの審査委員は、基本的に提出されたOutputをひたすら読むのみ。Sub Panelによりメトリクスを公式に参考データとしている場合は、評価の際の参考にできるが、そうでない場合は、メトリクスを参照したとしてもそれを評価に反映させてはいけないことになっている。

Simon Kerridge
Director of Research Services

Metrics Tideのその後（つづき）

- すべてのOutputに目を通し評価するためには、1か月以上の時間を要する。次回のREFでメトリクスを取り入れるかどうかはまだわからないが、注目されるところ。いずれにしてもメトリクスだけで評価することにはならず、**あくまでもピアレビューの参考情報としてwell-informed peer reviewとするための補足情報**という位置づけ。
- Sub-panelで数値指標を使うとなった場合、レビューアーは引用データの扱い方について研修を受けることが必須とされている。
- The Metrics Tideののち、イギリスではResponsible Metricsという概念が広がり、Loughborough Universityなど大学単位でメトリクスの利用の仕方に一定の方針を定める傾向が、数は多くないが見られる。

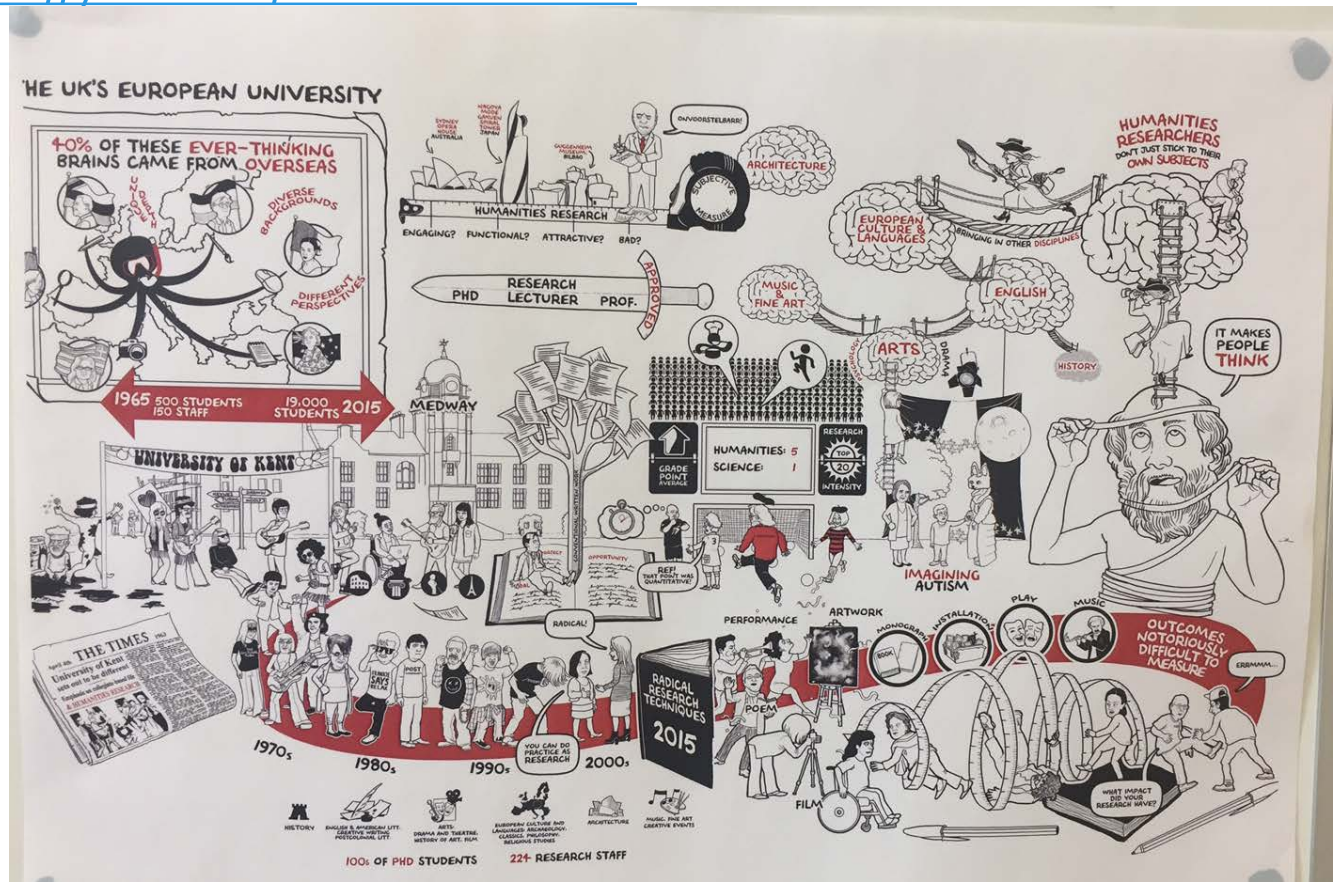
Simon Kerridge
Director of Research Services

ケント大の評価体制・外部資金関連

- ケント大において、REF関連業務はResearch Servicesが関与。インパクトについては、別のImpact Officer & Public Engagement担当が、PRも含め担当。新聞にカバーされたらその分析も。大学の歳入としたら研究費よりも学費の方が高いから、新聞も教育のカバーが大半。
- Brexitに関しては、この先2年間はHorizon2020に通常通り申請できるが、3年目以降は不明。資金源の多様化が課題。Associated countryとして何らかの立場を保持できると良いのだが。
- H2020フレームワーク9では、innovationによりフォーカスされるという噂。EUのS&Tアグリーメントを反映してのようで、予算は２倍になるのではと聞いている。
- 最近はBook ChapterにDOIを設けるという議論もある。ケント大の研究者のアウトプットについてはPure等を使って管理している。研究者のpromotionにも関係するため、きちんと申告しているはずである。

参考：人文学の可視化（学生へのアピール）目的にアニメビデオ作成

- https://youtu.be/NzbG1GcEEmQ



Sarah Slowe,
Head of the Office for Scholarly Communication

Office for scholarly communication

- 2名体制でスタートした新しいOffice。Scholarly outputについて、どこに、どのようにpublishするべきなのか、例えばtwitterなどSNSの利用はすべきなのか、など、研究者へアドバイスを行なう役割のOffice。
- 学内の様々なリソースを研究者とつなぐ役割。まだできたてで何をすべきか手探り状態のため、来月ケンブリッジ大学へ行き、国内であと一人いる同じポジションの人に相談に行く予定。

Prof. John Mingers

Professor, Kent Business School (Operational Research and Systems)

「研究評価の将来－ピアレビュー対メトリクス（数値指標）」企画について

- もともとセミナーを企画した段階では、ピアレビューとメトリクス双方のサポーターから議論をリードするような極端な意見を期待していたが、結果的に参加者のプレゼンは、ピアレビュー／メトリクス両方とも限界を了解しつつ双方のいいところを最大化すべきという折衷案が多かった。
- ピアレビューの最大の問題点は膨大なコストと時間がかかることと中身の不可視性。メトリクスはデータベース利用料以外それほど費用がかからないが、それが表すのは研究活動のほんの一部であることを十分に理解して使う必要がある。
- REFは何よりコストがかかりすぎ。メトリクスを使うことはその点である程度費用削減になるが、あくまでも補助的情報であるべき。それにより出版行動が変化するというのは本末転倒。

ビジネススクールに所属する経営学の教授で、ビブリオメトリクスに関する学会を主宰中であるにもかかわらず、研究評価におけるメトリクスの利用にあまり肯定的でないのは非常に印象的であった。

Prof. Roy Ellen

Professor Emirates,
Dept. of Anthropology & Human Ecology

REFの人類学パネルでの経験について

- Panel CのAnthropology and Development Sub-Panelのレビューアーを経験。
- 研究資金助成機関Research Councils(英国研究会議)は分野別に７つあるが、人類学はESRC(Economic and Social Research Council)。
- REFのSub-Panelではメトリクス数値指標の使用に反対した。結果的にアウトプットで提出された文献を1か月以上かけて読み込むことに。過剰労働だったが、パネルメンバーが比較的少なかったので、各レビューアー同士の評価が割れてもめることもなく、比較的スムーズだった。大きいパネル（人数・含まれる分野が多い）Sub-Panelでは意見がまとまらず険悪になることも多いと聞く。費用を削減するために、Panelのサイズについては近年大きくなっている。
- 人類学分野へのメトリクス利用について、高インパクトのジャーナルにだけ限定して出版などできない。インドネシアをフィールドとする自分にとって、インドネシアでScopusに載らないようなジャーナルに投稿することも研究者の道義的責任として必要。研究者間で高く評価されるジャーナルが高インパクトジャーナルとも言えず、そのリンクはできていないと認識。

Prof. Roy Ellen

Professor Emirates,
Dept. of Anthropology & Human Ecology

REFの問題点

- REFの問題として、学際研究が評価されないという問題がある。Sub-Panel間のはざまに落ちるような分野「Ethnobotany」など、守らないと分野自体がなくなってしまう。学際研究に関しては、別のクライテリアを設けて評価されることを期待。
- アウトプットのピアによる評価は、すべてのアウトプットにつき2人ずつで評価するが、主観的評価となることを避けられない。レビューアーとしての任務は、初年度、クライテリアの定義作業で年5回程度の会合、2年目は比較的軽く、3年目がアウトプットのレビューでかなりの重労働。最終的には合議で決める。その代り、教務を軽くしてもらい、ほとんど家で読む。
- こういうプロセスで、教育が軽んじられている。その反省から、先日、初のTeaching Assessmentがあり、LSEが金、銀、銅の**銅評価**となり、話題になった。LSE出身の自分としたら納得。教育が評価されないシステムは問題。
- REFについては、コストに見合っているのかという疑問がある。相当の時間やリソースを大学、研究者、政府がかける事になっている。かといって、簡単な方法で評価をしようとなると、metricsの利用のみという事になってしまう。

Lynne Bennett

Research Funding Officer, Research Services

外部資金獲得について

- 人文学専門のURA。Faculty of Humanitiesの教員の外部資金獲得を主な任務とする。
- 前職はWellcome Trust。ケントに来てからも、精神医学史など人文学でも医療関連の申請を通したことがある。
- ケント大学の場合、「We are Europeans」を大学のキャッチコピーとしており、外部資金も20%がEUからの研究資金。また、ローマ、パリ、アテネ、ブリュッセルにキャンパスを展開しており、EUからの留学生も多いことから、Brexitによりこうした資金源がなくなることが明らかであり、代替資金を探す必要に迫られている。
- イギリスの政府系資金Research Council系の資金はあまり取れていない。GCRF（Global Challenge Research Fund）が大学で数件。
- 一度、JSPS職員が語学研修で滞在していたことがあり、JSPSのファンドについてプレゼンを聞いたことがある。EUの場合は、Horizon2020など申請希望でもパートナーがいない場合、パートナー探しを手伝ってくれる機関（http://heranet.info/）があるが、日本・JSPSではないと聞いた。JSPSに関心はあるが、パートナー探しが一番のネックとなる。

Lynne Bennett

Research Funding Officer, Research Services

人文学研究を取り巻く環境について

- 人文学では規模は違うかもしれないがやはり日本と同様、社会に対しその有用性を主張し防衛しなければいけないという危機感を共有。最近オスロやゲント大学のURAを訪問する機会があったが、同じ様な課題をどこも抱えている。
- 可視化は重要な課題。研究者も社会と直接関わる（Public Engagement）イベントを開催するなど積極的にアウトリーチに努めている。特に若い教員は積極的。古代ローマ時代を研究対象とする教員は、ローマ時代の散策イベントを企画。ローマ人が嗅いだと思われる香り、食べたはずのパンなどを再現し、歴史的背景を説明しながら歴史を身近に感じてもらう工夫をしている。地域社会と研究・大学の距離を縮めて行く努力が必要。
- REFでインパクトが導入される前から、EU、Research Council系の資金ではPublic Engagementについて記入することが6-7年前から求められており、その点からも申請書作成支援の一環で、広報、アウトリーチに関してもアドバイス。Pathways to ImpactやREFのインパクトを意識して、大学外の関係者を含めた共同研究とするようアドバイスも。美術館・博物館、画廊などは、人文系にとって重要な学外の共同相手。
- 最近では、（政府系の）助成を受けている人文系における研究は、collaborative ではなければいけないという流れがある。個人での研究はどんどん減っている。特に若手研究者にとっては、どのような共同研究ができるのかという事を常に考えていかなければいけない状況である。